わたしの聖戦（ジハード）

◎◎女性が働くということ◎◎ 4

医学ジャーナリスト　植田美津江

女らしさと男らしさ

マリリン・モンローの映画を観たことはなくても、その名を知らない人はまずいないだろう。いまだ熱く語られる伝説のハリウッド女優であり、永遠に人々の心に生き続ける、アメリカで最も有名な女性のひとりである。今でも、ロサンゼルスのチャイニーズシアタを訪れれば、いたるところにマリリンのポスターやグッズを目にすることができるし、その出演映画のいくつかは名作として位置づけられている。

マリリンを彩る多くの言い伝えには、女性ならではのスキャンダルに満ち溢れている。私生児として生まれ、性的虐待の被害者であり、50ドルのお金に困ってヌードになった。3度の結婚と離婚、流産、ケネディ大統領との恋の噂、不可解な突然の死。何より、スクリーンに登場するグラマーな姿態と男性を誘うような表情やしぐさ……。彼女がセックスシンボルといわれるのも無理はない。

しかし私は、彼女の中に、ある種の潔さや男っぽさを感じることがままある。マリリンは、女性としての魅力を最大限に発揮してスターになった。が、彼女自身がただ女らしかったかといえばそんなことはない。29歳の頃、すでにトップスターでありながら、一時期ハリウッドを離れニューヨークに渡り、アクターズスクールで演技の勉強をしたのは有名な話。どちらかというと、ちょっと頭色っぽいけど役が多かった弱い女性の満がその原動力といわれるが、現状に満足することなく、女優としての自分への挑戦でもあったと思う。また、さらにさかのぼって25歳のときには、カリフォルニア大学の世界文学夜間クラスに入学し、その後も折に触れ音楽や絵画に親しむ努力をし、人間としての幅を広げようとしている。このような強い上昇志向には、目標を高く掲げてそれに向かって突き進む強さが垣間見えるし、女優ならではの旺盛なサービス精神には仕事への愛着と責任が見え隠れしている。

今や、仕事において「女らしい」とか「男らしい」というのは禁句となった。少し前までは男性が就く仕事と決まっていた分野にも女性が進出し、労働における性差の壁は次第になくなりつつある。例えば長距離トラックやバスの運転手がそうだ。車や飛行機の整備士や引越しなどの重労働も女性が担う。またその逆もありで、看護師や美容アドバイザーの男性版も珍しくなくなった。

マリリンの代表作「お熱いのがお好き」のラストで、主人公のひとりが女装をしていたために、ある富豪の男性から熱烈なプロポーズを受ける。困り果てた末にとうとう「俺は男だ！」とカツラをむしりとって告白するのだが（演じたのはジャック・レモン）、富豪男性のせりふは痛快そのもの。「Nobody's perfect」、つまり「完璧な人間などいないさ」であった。そう、人は完璧ではないからこそ、真摯に努力を続ける姿に魅せられるのだ。いい仕事をしたいという思いに「女らしさ」も「男らしさ」も関係ないのだと思う。

（財）愛知診断技術振興財団理事・研究所長）

イラスト・三浦義雄